

田中柊麻氏インタビュー



田中柊麻（たなか しゅうま）さんは、石川県小松市出身。2023年3月大東文化大学法学部政治学科を卒業し、石川県で小学校の非常勤教員を務めていた2024年1月1日、能登半島地震が発生する。その時のことを、語っていただきました（TT）。

取材日時：2024年8月12日（月曜日）

場所：大東文化大学板橋校舎2-303研究室

聞き手：武田 知己（大東文化大学法学部教授）、芹澤 優仁（同文学研究科修士課程学院生）

目次

- ・ 2024年1月1日能登大地震発生
- ・ 車でしか帰れない
- ・ 生徒の安否確認をどうやるのか
- ・ 小松に戻って
- ・ 穴水町の様子
- ・ 自宅半壊の様子
- ・ 小松に戻って
- ・ 生徒との連絡開始
- ・ 学校の再開
- ・ 再開した学校の様子
- ・ 地震発生のタイミング
- ・ 報道されない被害
- ・ 避難所からの出勤
- ・ 被災後半年の変化
- ・ 目で見た復興の様子
- ・ 非常時における心がけ
- ・ 地震からの教訓
- ・ 北陸という共同意識

2024年1月1日能登大地震発生

武田 最初に自己紹介をお願いできますか。

田中 はい。2023年に大東文化大学法学部政治学科を卒業しました田中柊麻と申します。よろしくお願いします。

武田 よろしく申し上げます。まず、地震発生当時の様子について教えてください。

田中 2024年1月1日の能登半島地震発災当時は石川県の輪島市、大屋小学校というところで勤務しておりました。現在ちょっと休職しているのですが、また9月から小松の小学校で働くことになっています。ただ、地震発生時はお正月だったので、埼玉に帰省をしていました。

武田 1月1日でしたね。

田中 はい、1月1日に埼玉に帰省をしていました。皆さんと変わらないように初詣に行ってお雑煮とおせちを食べていて、本当に普通の正月を送っていました。そんな中で16時10分の時には、川越のある商業施設のエレベーターの中において、エレベーターが2階しかない建物なのですが、2階に上がった瞬間に緊急地震速報になって、近くかなと思って携帯をみたら、能登半島で震度7かな（**武田** マグニチュード7.6ですね）、震度7っていうのがまず飛び込んできて、大丈夫かなっていうのを思った時に、川越もちょうと、くら〜と揺れるぐらいにはなっていて、これはここまで届くとなるとかなり大きな地震なんじゃないかなと思って。商業施設で待ち合わせをしていた知り合いに、新年の挨拶をして、すぐに家に帰ったら、テレビで町の空撮の映像がながれていて、道路が割れていたりとか、あるいは家が倒れているって映像が流れてきていて、これは帰らないとまずいかなっていうことになって、1月3日までいる予定だったのを1月2日の朝すぐに出て、石川に帰りました。

武田 なるほど。

田中 で、その道中なのですが、本来であれば新潟方面に抜けて北陸道経由で行き来するのですが。

武田 車ですか？

田中 そうです、車です。車で北陸道経由で、行き来するのが我が家の定番ルートなんですけれども、当日は地震の影響で、新潟方面、新潟と富山の間の北陸自動車道で亀裂が入ったりとか、一部崩壊っていう情報も出ていたので、途中まで行って、たしか群馬か新潟手前ぐらいまで、そう、長野を過ぎたぐらいまでは高速で行って、そこから下道で行こうとしたんですけれども、北陸を通っている国道8号線というのも土砂崩れが新潟県内で起きていて、通れなかったんで、1月1日の夜に、山梨から中央道抜けて、静岡、愛知を通して、滋賀、福井を北上して滋賀と福井から北陸道に入っていくっていうような形で、普段は通らない山梨から太平洋側を抜けて、帰るという。

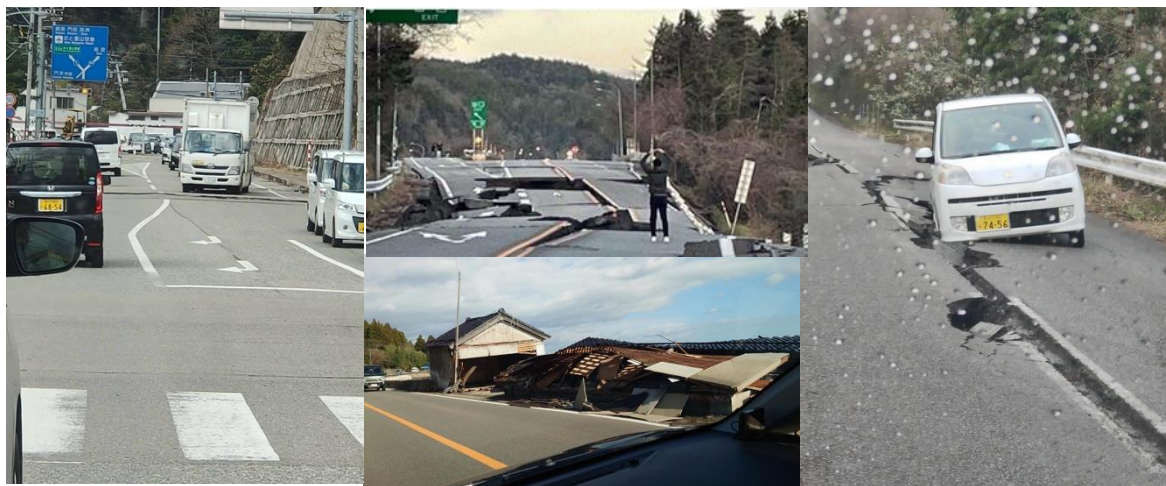
武田 お父さんとお母さんも一緒にですか？

田中 そうです。父、母、僕と弟の4人で一緒に帰りました。で、これ色々言ってるんですけど、ニュースはインターネットもそうですし、X（旧Twitter）、あるいはテレビ、ニュース、ラジオ、あとは、友達がやはりたくさんいるので、友達からのLINE等のメッセージで、小松はこんな状況、我が家はこんな状況だという風な感じで、逐次連絡して家の周りの情報はなんとか無事であろうと思ったんですけれども、私が住んでいたのが穴水町だったのですが、その情報がなかなか出てこなかったんですね。初めのうちは、1月1日の時点では。

武田 小松の御実家は大丈夫だったんですか？

田中 全くの無事だったんですけども、穴水町の情報が出てこなかったのはなぜかなと思ったんですけども、1月1日の時点で輪島の朝市が燃えているという情報が先に出ていたんですね。

武田 なるほど、なるほど。



写真：田中さんが自宅のある穴水町に向かう道中（田中氏提供）

田中 で、メディアのあるあるなのですが、火のあるところにやはりメディア行くんですよ。ヘリコプターでそこに行って報道するという…。ここに写真で出ている珠洲市、能登町、穴水町、七尾市の被害というのは、最初のうちほとんどやはり出てこなかったんですよ。一緒に働いている先生たちがやはり能登の先生たちなので、連絡の取れる先生とはすぐに連絡を取り合っていました。

武田 その連絡を取り合っていたというのは、帰ってからですか？

田中 いや、帰る途中で、1月1日からずっと取り合っていました。

武田 1月1日からということですが、連絡はついていましたか？

田中 当時15、6人の先生たちと一緒に働いていたんですけど、震災当時に連絡がついたのは校長先生を含めて4人だけでした。

武田 それは避難していたからですか？

田中 避難していたのもありますし。電波が通じる場所にいたからですね。穴水町に住んでいる先生が一人いたので、僕の自宅のすぐ上の穴水高校が避難所になってたんですよ。

武田 なるほど。

田中 そこへ行くために我が家の前を通られたって話聞いたんで、家の周りはどうでしたかって聞いたら、「家が崩れてました」という連絡をまず受けました。家が崩れてるんだったら、まあよくあるニュースでも見てるし、2、3軒倒れてるぐらいかなっていう風には思っていたんですけど、先生に前もお話したと思うんですけども、ああいうような状況になってしまっていました。詳しくは後ほどまたお話しします。以上が当時の様子ですかね。

車でしか帰れない

芹澤 今の内容に関してなのですが、結局、1月2日の何時頃に埼玉を出たなど詳しいスケジュールを教えてください。

田中 はい。1月2日の午前10時頃に埼玉を出発して、到着したのが午後8時前ぐらいでしたね。

武田 もう、ぐるっと迂回してもそんなもんなんですね。でも、10時間ですね。

田中 そうですね10時間ぐらいでした。いつもであれば6時間程度なんですが、やはり名古屋とか、大きな町を通ると時間がかかりますね。あとは、桂駐屯地とか浜松駐屯地などからの自衛隊の緊急車両などもかなりの数が一緒に走っていたので、やっぱちょっと渋滞気味になってたんですよね。愛知、蒲郡かな。蒲郡の駐屯地辺りの給水車両であったりとか、土木車両とか、消防やNTTの電波車両っていうんですか、なんかミリ波回線みたいなああいーうのがもう僕たちが帰る時間と同じぐらいにはもう到着、もう多分県内に到着してはいたんですね。で、多分近いところだと福井とか、もう本当に関西、中部方面からはどんどんどん、もうプッシュプッシュで、行け行けて、どんどん行けて感じで、我々も一緒に並走するような感じで一緒に帰ったって感じですね。

武田 その時に急いで帰省するような県民もいた感じですか？

田中 いましたね。富山方面に帰るのはやはり同じようなルートを通らなければいけないですし、あるいは福井もそうですし、そこまで多くはなかったですが、やはりちらほら石川ナンバー、福井ナンバー、金沢ナンバー、富山ナンバー、この辺り、北陸3県のやっぱナンバーを見かけましたね。

武田 なるほど。当時新幹線は止まっていたんですかね？僕は当時台湾にいたからわかんないですけど。

田中 どうですかね。

芹澤 新幹線は完全に止まっていたと思います。福井まで開通してかな？

田中 いやまだしていなかったと思います。3月16日の開通だったので。

武田 じゃあ飛行機も完全に止まってますね。

田中 止まっていましたね。

武田 じゃあ、帰るとしたら車しかなかったわけですね。

田中 しかないですね。僕の住んでいる小松は特殊な場所で、小松基地があるんですね。で、小松基地に多分向かっていたと思うんですけども、例えば、サービスエリア、愛知とかのサービスエリアに降りたら、ヘリコプターの音が、どう聞いても北陸方面に向かっているんです。で、多分、小松基地に向かっていたんじゃないのかなと思います。

武田 なるほど。

生徒の安否確認をどうやるのか

田中 で、その時思ったことなのですが、やっぱり、教員なので子供たちの身の安全が大丈夫かなという気持ちが強かったです。地震発生時、私自身が県外にいたので、連絡がいろんな人と取れましたし、校長先生とも取れていました。校長先生がまず安否確認の連絡を一番にとることになっていたし、何度も訓練はしていました。そして安否確認を行う方法が子供たちに1台1台、googleの端末、ギガスクール構想のもと、それが配られていたので、そのgoogleクラスルームというのをを使って、校長先生から「皆さん無事ですか」というのを、まず、時間にして、1月1日の19時半ごろには安否確認をしていました。

武田 1日にはもうやっていたんですね。

田中 はい。やっていました。校長先生から、googleクラスルームを使って、校長先生が作ったルームに、「無事です。無事です。〇〇無事です」とって、子供たちがどんどんそれを

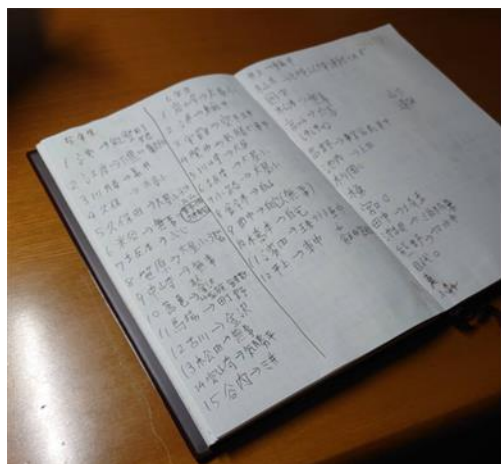
書き込んでいくっていうのを、訓練でもやっていました。ですが当日は県内の地域のほとんどで停電が発生していました。で、停電が発生してると何があるかっていうと、Wi-Fiが動かないんですよ。で、Wi-Fiが動かないと、このchromebookを1人1台配っていても。要は通信ができないんですよ。写真を撮ったりはできるんですけど、通信ができないってなった時に、その訓練を2度か3度やっていたんですけど、その時に、教頭先生との何気ない雑談の中で、「これ停電起きて通信ができなくなったら、ただの板だよね」っていうことを雑談で言っていたのを思い出しました。で、その話を思い出して、いつも子供たちと欠席の連絡を取り合う「テトル」というアプリのことも思い出したんです。

武田 テトルっていうんですか？

田中 はい。その「テトル」には欠席機能というのが付いているのですが、この欠席機能というのが、欠席を押して例えば「風邪で休みます、腹痛で休みます」という風に理由を書き込みをすることができるんですよ。

で、その1つにその他というところがあって、例えば「病院に行くから遅れます」とか、そういう風に書き込みするところがあって、それを使えば、親御さんのスマートフォンが通信できていれば、こちらとの連絡が取り合えるよねということを思い出してはいたんです。けれども、やはりそのクラスルームの連絡の方が、校長先生がやったことなら先に連絡が来なければおかしいなっていうのを思っていた。とりあえず、1時間、2時間待ってみたんですけど、やはり連絡が来なくて。

それで校長先生と連絡を取り合って、生徒たちから安否確認の連絡が来ないので、「テトルの欠席の連絡機能を使って安否確認の連絡を、田中が指揮を執りますので、やってもいいですか」という確認をしたら、校長先生からは「お願いします」ということを言っていたので、時間にして、1月1日の21時半頃にその安否確認の連絡を出しました。



武田 その安否確認の連絡は、川越とか埼玉からしていたんですか？〔写真：田中氏が実際に使っていた安否確認のノート〕

田中 川越の祖父母宅のベッドでやりました。

で、もう1人、自分と同じように県外にいた先生がいたので、その先生と一緒に連絡を取り合って、僕が打ちますんで、先生も安否確認をお願いします。教員はテトルでは全て管理者という立場に設定されているので、先生たちなら全て確認ができることもあって、お願いしました。学校の生徒の人数が、1から6年生までで80人なのですが、私は

児童の顔も名前も順番も大体一致していたので、当時使っていた日記帳に「無事とか、大屋小に避難している」とかっていうの、ずっとその夜の間に安否確認をし続けていました。

武田 アプリで安否確認の連絡をして、何時ごろから返信が来たんですか？

田中 連絡が来たのは 22時頃でした。当時大屋小学校に避難していた人たちは通信も通じていたので、そこに避難しているご家庭からは続々と連絡が入ってきました。

武田 連絡が来てからどうしたんですか？

田中 どうしても次の日は朝が早いっていうのが分かっていたので、その日は寝させていたでいて、朝起きたら寝る前には連絡が来ていなかった家庭からもどんどん連絡が入ってきていて、帰る道中も車の後ろでずっと県外に出てる先生と電話で連絡をとりながら安否確認

の作業を行なっていました。道中も大学の友人など、色々な方々から電話が来たり、色々してたんです。それで、1月2日の21時に自宅に着きました。その大体1時間後ぐらいには大体半数の家庭から無事ですという連絡が来ていました。テトルの管理者はやはり端末の電源が入り、色々な連絡を取れる必要があります。ですから、県外にいたことはある意味でラッキーでした。僕がいたというのがラッキーだったと思いますね。

小松に戻って

田中 それで、ずっと悩んでいたのが、教頭先生と連絡が繋がっていない状態で、その下の教務主任とは連絡が繋がっていたんですけども、教務主任の自宅もちょっと危なかったようで、高校に避難していたんです。そして、教頭とは連絡がつかない。校長とは連絡がつくけれども、校長先生もあの燃えた輪島の町の近くに避難していたので、もうてんやわんやな状態でしたね。

で、他の先生は僕より上の先生なんですけど、他の先生はもう輪島の街の中とか違う町にいて、連絡がつかない状態でした。1人だけ、僕の直の先輩が長野県出身なんで、年末年始は長野にいたんですけども、本当に頭をもうものすごい飛び越して、教頭を飛び越してまでこれをやってしまったことに、果たしてそれはよかったのかっていう葛藤がずっとどうしてもあったので、その後も本当に教頭にも確認せずにしてしまったことに葛藤を覚えていました。

（日記を見ながら）1月5日の18時頃には全家庭から連絡が来て、児童全員、小さな怪我はしたかもしれないけども、命に別状はない、無事ということが分かりました。

その後、教頭先生とも連絡が取れて、電話の中で「全部やってくれたんだって、ありがとう、本当にありがとう」っていうことを言っていただけで、自分の判断は、間違っていなかったのだと、あの時にやりますって言った判断は間違っていなかったんだなっていう気持ちでいっぱいになりました。

これは〔先日法学部で講演した際に〕学生にも伝えたんですけども、やって失敗するよりも、やらなかった後悔の方が本当に辛いんですよ。これは、その時に学んだというよりも、改めて感じたことですね。

武田 なるほど。

田中 はい。あとですね、1月2日に帰ってきて、3日の朝のことでした。いつもの小松の朝は静かなんですけど、バタバタバタバタバタバタバタバタバタバとヘリコプターの音がずっと鳴り止まない、朝から晩まで鳴り止まない状態でした。よくよく話を聞くと、小松基地の方に飛んで行きました。小松基地はたしか最前線基地になっていましたよね？

武田 そうでしたね。

田中 小松基地からヘリコプターでどんどんどんどん救援物資が運ばれてきました。また、これは私が勤務していた学校とは違う学校の先生の話なんですけど、輪島市のちょっと山奥の方にお家がある先生なんですけども、輪島市のご家庭で道路が寸断されて避難できない状態でした。集落全体がもう避難できない状態でした。そこで、自衛隊のヘリコプターを使って救出が行われました。まず輪島の町の中に一旦降ろされ、救助されて、そのまままた違うヘリコプターに乗り換えて小松基地まで輸送されたそうです。そこから小松にある温泉街の栗津温泉とか、あるいは加賀の山中温泉に、そのまま、着の身着のまま旅館に避難、2次避難ですよ、そうやって避難をするっていう方も話聞いているだけでもう5、6世帯知ってるので、多分何十世帯とあったと思います。

武田 なるほど。小松は全然被害もなかったんですか。

田中 町の中で崩れてるところはあったんですけども、本当に数える程度っていう感じで。あとは道路やインフラが問題でした。小松は城下町なので、古い道路がやはり多くて、ちょっと傾いてしまったり、あるいは陥没してしまうところがありました。

武田 自衛隊は空から行くからあんま関係ないでしょうか？

田中 そうですね。多分、陸上自衛隊の場合だと、金沢駐屯地が 最重要最前線基地、最前線の指令基地になっていたと思われます。航空自衛隊は小松からでした。

武田 なるほど。

田中 海上自衛隊は、金沢港から出発して、日本海を通過して輪島の方から入るという感じだったらしいです。で、私の大屋小学校の校長先生は、輪島から珠洲に抜ける海沿いの国道249号線の前に住まわれていたのですが、自宅に一旦戻られた時に、自衛隊の水陸機動団がホバークラフトにこう乗って救助しに来たっていうお話をされていました。映画のような光景を見たっていう感じで、海上自衛隊は軌道運用からこう救助してっていう感じでした。

武田 最終的には海から来たんですね。

田中 そうですね。そしてそのまま金沢港つけたのと、あるいは金沢港にクルーズ船が来ていたので、金沢港のクルーズ船にお風呂もあるし食事も提供できるっていう感じで、輪島から車で来て、そこで1泊、2泊してまた戻る、あるいはまたこう繰り返すっていうことをやっていたっていう方も聞いています。

穴水町の様子

武田 能登に戻ったのが1月3日でしたっけ？

田中 いえ、荷物をまず取りに行くのと、その自宅の状況を把握していなかったのが、穴水町に戻ることになったのです。一旦荷物だけとりあえず取りに行こうということで、1月5日に穴水を見に行きました。で、3、4日いたことになりましたけれども、というのは3日は父が「どうしても一人では行かせない、どうしても危ないから駄目だ」というので、父と一緒に行かなければということで、2日に運転していたので、3日は父が疲れていて、しかもまだ県の放送とかで、奥能登地域への不要不急の外出はお控えくださいと いうことが流れていて、で、映像でも、この話をしたら本当長くなってしまうのですが、金沢から輪島の方まで通ってるのと里山街道という、高速道路ではないんですけども、制限80キロまで出せるんです。昔有料道路で今無料になってる道路があるんですけども、そこが崩落していて通れなくなっていました。金沢方面でも亀裂が入ってるっていうところが多く、そこも通れなくなっているのが、羽咋市までは、のと里山街道で行けても、そこで降ろさせられて、下道、国道249号線を通って能登に行くというルートしかなかったんです。なので、その道が、とてつもなく混んでました。荷物を取りにきたい人、家族を助けに行きたい人、緊急車両、自衛隊、片側1車線で海沿いを走っていく道なんで、本当に狭い道で、それを抜け行く方法がそこしかないんで、自分は命が無事なのに、荷物を取りに行くことで自衛隊の方とかの迷惑になってはいけないっていう気持ちがやっぱりあって、3、4日と自宅で安否確認に集中していました。

武田 さすが災害の勉強をしていただけありますね

田中 で、4日の夜になって、穴水町の被害状況がわかってきて、これはすぐに行かなければいけないということを感じたので、5日に能登に行くことになりました。

5日の日は朝の6時に小松の自宅を出て普段であれば2時間半ほどで、穴水町に着くんですが、当日は6時間ぐらいかかりました。そうですね、12時から12時半の間ぐらいに到着しました。で、道中は、緊急車両と、やはり荷物を取りに行く人、助けに行く人で溢れ返っていました。で、能登から帰ってくる。対向車線ですよ。車のフロントガラスが割れてるのに運転せざるを得ないから運転して、寒い中運転している車両もありました。あるいは救急車なんかも走っていました。あれらは多分富山に行った救急車だったのだと思うんですけども、足を怪我している人を運んでいる救急車がやはり多かったです。消防車もしかりなんですけども、多かったです。

自宅半壊の様子



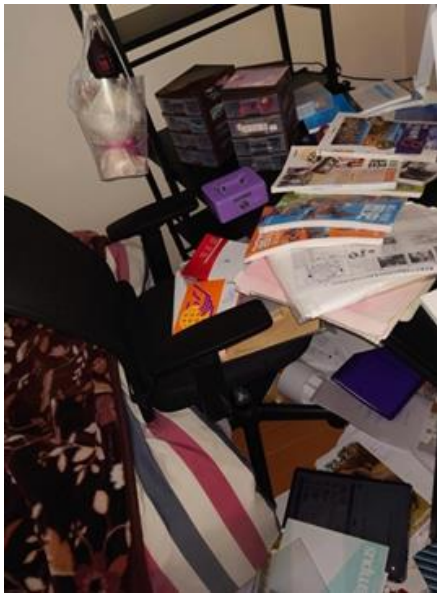
の自宅。田中氏提供)

で、近くに行った写真（右。田中氏提供）がこういう感じなんですけども、元々はさっきの下に抜ける道をこういう風にして、ただの本当に坂道だったんですけども、いざ行ってみたら、消防隊員が30人ぐらいいて。何かなと思っていたら、ニュースでも流れたのですけれども、子供さんとご家族を亡くされた方、7人を一度に亡くされた方もこの辺りにいらっしゃって… 自分はこの電柱を通り越えてこの自宅に入りました。で、入ったんですけれども、家がもう歪んじゃってて、玄関は開いたんですけど、玄関からリビングに抜ける扉が開かなく、もう傾いちゃってて、開かなくなってたんで、消防隊員の人に「何か方法ないですかね？」って聞いたら、「家財保険とかに入られてるんだったら我々がバールトハンマーでこじ開けます」と

田中 で、自宅についたら自宅への道が2本あるのですが、下側から行ってこっち側が海なんです。海からこう上がって行って、ここが大体自宅です。ここに来ると、ちょっと遠回りなんですけど、山を越えてこっち側から入ってくる道が2本あるのですが、同じ道には出ますけども、2本あるんです。いざ、近い、小松から近いのがこっちの道なので、こっちの方で来てみたら、もうここに、上にソーラーパネルが置いてあったんですけども、そこがもう全部持ってかれて、家を巻き込んでいて、ここ通れないなって、じゃあ反対側から通ろうっていうことになったら、自宅、これなんですけれども、ここにもう土砂がもう溜まってしまっているっていう状況でした。（写真：2025年1月6日の北陸中日新聞。赤丸が田中氏



提案されました。扉にボールを入れていただいて、こじ開けてもらってたっていう感じですね。



家の中はぐちゃぐちゃな感じで、もうひっちゃかめっちゃか、電子レンジが落ちてるわ、テレビが倒れてるわという感じだったんですけれども。写真のような感じです（写真左。田中氏提供）。で、家の裏から見た、窓から見たのが、先ほどの土砂崩れの家がここなんですけども、ここが大体ここから、自宅から先ほどの下のところまで250メートルで、後々聞いたら、この間で16人亡くなっている。たった250メートルの間で16人が亡くなってしまっているっていう、とてつもない被害現場にいたんですよ。我が家は、この土砂崩れがあったところから大体1.5メートル高台だったので、なんとか土砂崩れに巻き込まれずに、家の荷物とかも全て無事だったんです。ただ、ご遺体が運ばれる現場も2度ほど、その同じ場所で2度ほど見えています。ご家族と思われる方が病院

で亡くなったっていう知らせを受けられて、泣き崩れる瞬間も見えています。本当に辛かったですね。

で、この、どうしても、この電信柱が倒れていて、道路が通れないで、電気も来ていない、水もダメっていうことになってしまったので、ちょっと今はまだ住めないっていうことになって、その日は、とりあえず、電化製品とか、貴重品、保険証、パスポートとか、そういうものを持って家に帰ることになりました。ここで滞在していたのが、大体1時間から1時間半程度滞在して、2時頃にはもう穴水町を出ていました。

武田 また住めたら、穴水町の方に住むつもりだったんですね。

田中 はい。仕事もあったので。

武田 なるほどね。

田中 1月の5日までが一応冬季休業ということになっていたのですが、6日からは、一応仕事っていう風には年末に聞いていたので、働くつもりではいたんです。けれども、ちょっと自宅がこういうことになってますっていうのを校長先生にはお伝えしました。とりあえず、「今は安全なところにいてください」という指示をいただいたので、小松に戻りました。

能美市でのボランティア

田中 1月5日の2時頃出たんですけど、18時頃に自宅に、小松の自宅に着きました。帰りは行きよりもやはりスムーズに帰れて。そうですね。6時頃には着きました。結論から言うと、能登にその後行くのは2月になってからなんですよ、僕は。

武田 え、自宅待機ですか？

田中 はい。2月になるまで自宅待機。要は小松の自宅にいたっていうことになるんですけども、大体1ヶ月ぐらい小松にいたんです。1月8日頃までに、とりあえず自宅、安全なところにいましょうっていうのが学校の先生たち全員に伝わった。それは輪島市の教育委員会から連絡が、校長先生宛てに言われたことです。多分、県の教育委員会から輪島市の教育委員会、校長先生、我々っていう形になったんだとおもいます。大体このぐらいになったら学校全体の先生と連絡がほとんどついていました。そこからはですね、勤務できる先生は学校

に行って、学校の避難所の運営、あるいは救援物資が小学校の避難所にたくさん来ていたので、その仕分け作業がもっぱらだったというのは私聞いているんですけども。私は、要は自宅が被災している状況だったので、お手伝いはしたくてしょうがなかったんですけども、仕事ができないってような状況だったんですね。

そんな時に、勤務校で働けない人は最寄りの避難所のお手伝いをしてくださいという指示が来ました。で、私は、小松市のお隣の能美市というところがあるんですけども、その支援物資の仕分け所みたいなのが体育館にできていて、そこでずっと、能登方面に行く生理用品であったりおむつ、水とかを仕分けする作業をやっていました。

武田 運営は自治体がやるんですか。

田中 そうです。ボランティアの方と、自治体の、その市の市役所の方がやる感じです。

武田 こういうのを手伝いってという指示が、教育委員会の方から来たということですね。

田中 そうですね。要は、教育公務員なので、公に努めなさいってことを言われたので、本当は小松市で働きたかったんですけど、自衛隊と連携を取って被災者をどうやって避難させていくかっていう方に集中していたみたいで、この段階ではやっていなかったっていうのが現状でした。それで役に立つ方、お隣の能美市に行って、「輪島市で小学校の教員していました。ちょっとお手伝いをさせていただきたいんですけども」って言ったら、シフト制みたいな感じで、今日は午前中、明日は午後みたいな感じで、ちょっと時間変動的だったんですけども、お手伝いをしていたっていう感じです。

生徒との連絡開始

田中 それに加えて、勤務はできないんですけども、8日ぐらいになったらwifiとかも避難所ごとに設置されるようになってきて先ほど言ったgoogleクラスルームが使えるようになりました。なので、子供たちとそれで連絡を取り合おう、それで元気づけようと思いました。

「田中先生は無事ですよ、皆さん元気ですか」っていうことを言ったら、子供たちが「今日は福岡県警のパトカーが来ました」と言って写真を送ってくれたりとか、そんな感じで、遠くにはいるけれどもコミュニケーションは常に取り続けるっていう、お互いに無事を確認し合うという意味でも、それを行い続けました。それも、一緒に並行していました。

武田 他の先生は、輪島とか、そういうところで、避難所生活しながらやってる人もいたのでしょうか。

田中 いや、ほとんどいなかったんですが、同じ学校で1人いました。ご家族は避難してるけども、ご自身は避難所に行って、ご自宅もうめっちゃめっちゃなので、避難所に住みながら勤務するってような先生がいました。他の先生のうち、大体8割ぐらいの先生は自宅から通われてる。残り大体1割は、もう自宅がぐちゃぐちゃになっちゃって...

武田 つまり、8割ぐらいの先生は自宅がそれほどでもなく、半壊以下だったのでしょうか。

田中 そうですね、物が倒れたとか、そういうことはあったかもしれないんですけども、通える程度でした。しかし、例外なのは、ある先生のご自宅が、輪島の門前地区というところなんですけども、ご自宅はもうちょと住めないってことになって、奥様のご実家から毎日通われていました。結構、距離はあるんですけど、往復で5、6時間かけて、1月8日ぐらいからもう働いていました。すごいなと思いました。

武田 避難所から学校にいきなさいってことはやっぱり勧めないもんなんですね。

田中　そうですね、命の危険がやっぱりあるので。僕も「どこか避難所に行って働いてもいいですか」というのは、校長・教頭先生に確認したんですけども、「いえ、命が第一なので、まだ安全なところにいてください」ということを言われました。

学校の再開（写真左：再開した学校の様子。田中氏提供）

田中　1月の20日頃になると、学校の再開ということが、話に上がり始めました。それはですね、学校ごとにオンラインで授業をしようということで、コロナの時もそれでやっていたのですが、Google meetというのを使っていましたね。これでまたオンラインで授業をしているっていうのは続いたんです。でも、避難所とかに避難している子、あるいは、自宅から学校まで通える子は、学校の中で授業をすることになって、加賀地区とかに避難してる先からはオンラインで参加するってかたちになりました。僕は特別支援の担任だったので、正規の先生みたいに授業を持っているわけではないんですよ。この子たちと算数、国語をやるっていうのをやってたんですけども、その子たちをよく知ってる先生が学校に行ってくださってたので、僕は、一緒に子供たちとオンラインで参加して、一緒に問題を解いたりコミュニケーションを取ったりっていうのを1月の20日頃から続けていました。



それで、ボランティアというか、能美市での働くのは、もう中止していいですよっていうことを言われました。学校業務に専念してくださいっていう感じなんです。けれども。オンライン授業って言っても、国語と算数合わせて1時間程度、1から6年生まで1時間程度。とりあえず、主要科目だけ、国語、算数だけは遅れられないので、国語、算数は1時間程度をやって、僕もそれに参加して、夕方4時半頃から、また、各学年ごとにあつまんですが、1学年1クラスなんで、要は6クラスしかないわけですよ。で、そのクラスごとに集まって、お話のオンラインみたいな、要は、「今日こんなことあったよみたいなのを話し合う」ということでした。それが大体2月の4日ぐらいまで続きましたかね、2月の4日ぐらいまで続いていたんですが、1月の31日頃に、校長先生から電話があって、教育委員会から2月の6日に学校を再開させるということが決定したという連絡が僕にも来ました。「で、自宅の方はどうですか？」って言われたんですけども、大家さんとかに確認したら、「まだ電気も来てない、水道も来てない。更にこの土砂災害の土砂がまだ残り、規制線が貼ってある、ちょっと住める状況ではない」ということ言われて、それをお伝えしたところ、僕の勤務してる小学校から、大体車で10分程度のところに、河原田小学校っていう別の小学校があり、「その2階に、教員のための避難所を、教育委員会が用意してあります。そこに住んで働いてくれませんか？」っていうこと言われたので、そういうことであれば勤務させていただきますということで、2月5日に能登に戻りました。

武田　大変でしたね。

田中　ただ、その前に自宅の確認がしたかったので、2月1日に一旦穴水町の自宅を確認して。必需品とか何もなかったんですけど、自宅の落ちてしまったガラスとかをそのままにしておいてしまったので、その片付けを朝からやって、その日は帰って、2月6日に働けるように、2月5日に能登にまた向かって、2月5日からその河原田小の2階に住み住んで勤務してい

ました。勤務形態なんですけれども、大屋小学校単独での再開ではなく、市内の小学校のなかでも町の中心部に近い小学校が6校を、輪島高校の一部を間借りして再開させると伝えられました。だからそのあたりの子供たちは全部輪島高校に通う、教員も朝学校に集合して、みんなで勤務先の小学校から乗り合いをして高校に向かうような感じでした。1学年1クラスですが、高校の校舎、高校の場合だと空き教室が多いんですよね。なんとか準備室とか、あるいは、アクティブラーニングルームとかって残っている教室があったということなので、3棟あるんですけども、高校生、中学生、小学生って1棟ずつ入って、我々も働くことになりました。

あと、子供たちの数が大体どこの小学校も半分程度になったんです。近くの親戚の家も自宅がもうぐちゃぐちゃになっちゃったから、加賀地区の温泉街に避難したり、金沢のホテルに避難するっていうような感じで、結構行ってる場所もバラバラって感じでした。埼玉県に避難してた子たちいるんです。そういう子たちは1月20日頃からそっちの小学校に通ってたんですね、特別編入みたいな感じで。数か月間だけ、進度は学校同士ですり合わせていただいてとにかくお世話してください、お願いしますっていうのを、教頭先生が全て対応されていました。半数ぐらいは県内外の小学校で、もう登校していたというような感じですね。で、残っている子供たち、親戚もずっと輪島にいる、あるいは身寄りがあまり多くない、仕事の関係でこっちに残っているというような、たとえば市役所職員の息子さんとかになると動けないんで、輪島に残っていました。大体どこの学校も半分、もしくは半分以下になっているってことだったので、高校になんとか入れられるぐらい1クラス40から50人程度にはなっており、小学校だけで240人ぐらい集まっていたっていう感じですね。ただ、先生たちも実に6校分の先生がいたんですよね。

武田 そうですか。あの、たとえば、大屋小学校は別に壊れてなかったのでしょうか。

田中 うちの小学校が1番安全で無事でした。

武田 そうですか。

田中 ただ、理科室の電球とかが落ちてきちゃったりしてはいましたけれども。1番ひどかったのは、例えば、もう学校全体が歪んでいて、歩いたら、ピサの斜塔状態、もう斜めになっちゃって、そんなところがあったんですけど、うちの小学校は無事でした。我々はスクラムを組んで、大屋小学校で単独再開させてくださいっていったんですが、なかなか・・・

武田 場所が、輪島高校になったのは、大屋小学校に集まることは難しかったからでしょうか。

田中 大屋小学校が80人の学校で、クラスがどうしても狭いんですよ。で、240人はちょっとで机と椅子がないんで受け入れはちょっと難しいです。でも、だから高校っていうのもないだろうと思ってたんですけど、でもそう決まりました。それで、高校から大体歩いて3分ぐらいのところに小学校が1つあるんです。そこから僕が行く前に、先生たちが机と椅子をトラックに乗せて、それを降ろす作業をしていました。

再開した学校の様子

田中 学校の授業のやり方は1年生なんかだと、国語、算数、生活、体育、道徳、本当に数えるほどしかないんですけど、それぞれの先生が得意なことをやろうと。音楽の先生もいれば、体育が得意な先生もいるんだから、教科担任制ですよ。いわゆる高校みたいな感じで。僕は特支の担当でしたので、部屋が別に用意されていて、その子と一緒にマンツーマンでやってるって感じだったので、あんまり関わってはいなかったんですけども。

武田 体育館を仕切って授業を実施するのではなくて、教室ごとでやっていたんですね。

田中 学年ごと、教室で行っていました。門前地区の小学校は体育館を間仕切りにしてやってたってことなんですけども、これも1つ話があって、門前地区というのは門前東小と門前西小って2つの小学校がありました。でも、この2つの小学校って、車で10分ぐらいしか離れてないんですよ。本来であれば統合するのが筋と言えば筋なんですけど、事情があり統合していませんでした。本当よく話なんですけど、これを機に統合しました。ただそうすると、人数が少ないところでわちゃわちゃ優しく、楽しくやってたのが、急に40人のマンモス校って感じになって、ちょっとびくびくしてる子もいたみたいですね。

しかし、やっぱり子供たちは柔軟で、幼稚園が一緒とか、そんな子もやっぱり多いんで、意外とこう、仲良くなって、結構早いうちにみんなで輪をつくっていたんです。ただ、門前地区なんていうのは、門前西小ってところも東小ってところも、人数が少ないので複式学級が当たり前だったんです。1、2年生教室、3、4年生教、5年生教室、6年生教室、こんな感じになってたんですけど、門前西小と急遽統合したことで腹式学級が解消されたんですよ。保護者に見てみたら手厚く1年生の先生が見てくれるから、これラッキーだよっていうことになったっていうプラスの側面もあったんです。市内の6校の小学校に関しても、小さな小学校なんかは複式学級は当たり前だったのが、こう一緒になったことで手厚く9人も先生が見てくれるし、学校らしい雰囲気を楽しめるっていうことになって、保護者によっては良かったよっていうこともありました。ただね、おじいちゃん、おばあちゃんぐらいになってくると、いや、なんでうちの地区から小学校がなくなっちゃうんだみたいなこともあったようでした。

武田 生徒さんは、もういろんなところからその輪島高校に来ているということですか。

田中 そうですね、距離で言ったら、端から端の地区で言ったら車で40分以上離れてる、それが真ん中ぐらいの輪島の街に集まるんです。でも、燃えた町、輪島の朝市から車で、そうですね、1、2分ぐらいにあります。

武田 バスで来るんですか、それとも自家用車ですか。

田中 ご家族が乗せてくるって感じですね。

武田 乗り合いみたいなこともあるんでしょうね。

田中 そうですね。ただ、その輪島高校の駐車場には止めないでくれっていうことは、我々教員も保護者も言われていたんです。それは、自衛隊の車が入り出すんですね。輪島高校のグラウンドが陸上自衛隊のベースキャンプじゃないですけど、そういうような感じになっていたりしたので、自衛隊の出入りが激しいから接触事故可能性があり、ちょっと子供たち、特に小学生はそこで出入りしちゃうと危ないってことで、そこには我々も車止められないということになって、近くの公会堂みたいなところで駐車場に止めてたんです。

武田 避難所から通ってくる生徒さんもいらっしやったのでしょうか。人数としては、多い感じですか。

田中 そこまで多くはないです。各学校の、各学年にの5分の1か6分の1、40人いたとしたら、8人とか6人ぐらいなんですけども、そんな子たちの中でも、印象的って言ったらあれなんですけど、他校の子ですが、燃えた街を見てしまった子がいて、普段もっと明るい子なのに、ちょっとPTSD気味になっている子がいたりとか。その学校の先生も「あの子はもっと元気だったんだけどね」みたいな話を聞いたり。輪島という町が好きな子は特にそうってしまった。今まであったものが崩れてしまう、たった一晩で崩れてしまうのってやっぱりショックなんですよね。

武田 僕も映像でしか見てないですけど、輪島の朝市の様子は、いってみれば「戦地」と一緒ですからね。

芹澤 それで言うと、最初はここに来ていたけれども、だんだん来れなくなった生徒さんっていうのは、人数的にはどうですか。

田中 たぶん、いないと思う。それはやっぱり避難所だとおじいちゃん、おばあちゃんしかいなかった、家族しかいなかったのが、今まで遠くに避難してた子が、学校再開するからって戻ってきた子とかもやっぱりいたわけなんですよ。やっぱり子供同士のコミュニケーションっていうのはやっぱり大きかったみたいで、そんな子もちよっとずつ元気になってきたり、あるいは、今まで友達じゃなかった子が、中学ぐらいまでは、本来であれば会うことのない子が、もうこの段階で仲良くなってる。

芹澤 じゃあ、急に学級が増えたり、なんか環境が変化して、それが悪影響ばかり大きかったわけではないのでしょうか。

田中 ではないです。子供たち同士のことはわかんないですが、もしかしたらプラスの側面の方が、もしかしたら彼らにしてみたら大きい部分もあったのかも。

芹澤 比較的、大きかった。

田中 うん。

武田 ご家族を亡くされた方っていうのは、全部で今のところ、340人ぐらいだそうですね。

田中 はい。340人の皆様には大変な思いをされはしますが。うちの小学校に関しては、ご両親を亡くしたっていう話は幸い聞いてないですし、もしかしたらおじいちゃんおばあちゃん亡くされた方、いるかもしれないんですけども。ありがたいことに、そこまで土砂とか火災とかの被害、津波もなかった地区でした。内陸の方の学校だったので、それは幸いなことなんです。しかし、多分、他校だとご両親を亡くされた方はいると思う。能登町っていうところでは中学生が亡くなったって話は聞いたんですけども、やり切れませんね。輪島の小学校とかでは子供が亡くなったという話は、何も私の聞く限りでは聞いていないので、幸いなことに子供たちは全員無事だったのかなという感じです。あと、お正月という特殊な件、状況で、私みたいに違うところに帰省してて無事だったっていうところがありました。子供たちもやっぱり大阪のおばあちゃんちにいましたとか、金沢のおじいちゃん、おばあちゃんの家にもいましたっていう、それもやっぱりちょっと特殊なあれですけども、そういう家族もいましたね、自宅は。でもその代わり、ぐちゃぐちゃになってたから、もしかしたら当日いたら危なかったよねとか。

地震発生のタイミング

武田 被災された方には心からお悔やみ申し上げますが、ただ、あの地震の発生の時間、16時っていうのは、被害が少なかった理由の一つですよ。

田中 落ち着いている、夕食の準備をしようかな、ぐらいですね。この間の、宮崎の地震もね、4時43分でしたっけ。

武田 もう1時間遅かったらわかんないね。

田中 本当ですね。阪神淡路みたいにご飯の準備中に火事によって死者もたくさんでたでしょうね。

芹澤 そうですね。本当にそのタイミングからはずれてる。

田中 あと正月だったというのも重要でした。避難所にいた先生から聞いた話なんですけど、松坂牛だのなんだの肉がたくさんあって、それを取りあえず焼いて食ったみたいな話が意外とあって。もう 震災直後、直後やお正月に家族が帰ってくるからって言って、いいもの用意してたんですよ。あとは、輪島ってところが、起伏が激しくて、水道行政がものすごくめんどくさい、やりづらいところなんです。平坦なところがなくて、大きな川も少ないんです。ただ、山水を汲んでいる家庭ってすごく多かったんですよ。だから、山水があったから電気さえ来ればお風呂入れるよっていう家が結構多くあれば、逆に、普通に水が水道管しか取っていないから、水は来たけれど電気来ないから入れないとか。

報道されない被害

田中 でも、印象に残る場所とか建物、出来事といえば、やっぱり穴水なんですよ。さっきも言いましたが、もう自宅の前がたった250メートルの間で16人亡くなってしまった。この間、3月に宮城教育大学の武田真一先生が視察に来られた時に、穴水町でボランティア活動をされてたんですけども、穴水町の商店街でも建物はやっぱり倒れていて、町の中では4人ぐらい亡くなっているんですよ。でも、穴水町は、報道ではここ全然上がらないんですよ。全国ニュースにも、地方、石川のテレビのニュースでもほとんど扱われない。どうしてもその人がたくさんいたところに焦点がいつてしまう。輪島の燃えた町の商店街に焦点がいつてしまう。津波があった能登町とか珠洲の町に焦点がいつてしまう。僕が実際に住んでいた、本当に何気ない日常生活を送って、その近くで、たった250メートルで 16人も亡くなってる。これは報道もされない。ちょっとそれは住んでたから余計にショックっていうのが大きいです。

武田 それは大事ですね。

武田 あとは、これが、輪島の燃えた町の近くでビルが倒壊したっていう、五島屋っていう、輪島の漆器、輪島塗りのお店だったと思うんですけど、これが7階建てくらいなんですけど、これが道路側に倒れてしまって、この先が輪島の燃えてしまった朝市なんですけど、ここがやっぱりテレビで出た時は、あ、こんな建物が倒れてしまうんだっていうのがあったのと、私自身がここの2軒隣を内見していたので、こっちに住んで寝てたら正月で帰省していなければ僕は多分死んでただろうなっていう気が…

武田 だろうね。

田中 ちょっとそれは変な、悪運じゃないですけど、そういう変な運があり、生き残れる運があるのかなっていうのは自分では感じてました。

武田 なるほどですね。

避難所からの出勤

田中 2月から自分は河原田小学校ってところで住んでたんですけども、大体それが1ヶ月間、3月3日ぐらいまで。どんな生活だったかっていうと、月から金まで勤務がありました。月から金まで毎日避難所で寝泊まりはするんですけど、もう金曜日の夜には小松の自宅へ脱出を試みていました。河原田小では緑色のテントの中に暮らしていました。ダンボールベッドで暮らしてたんですよ。そこで荷物を全部まとめて、その洗濯物をたくさん積んで小松に帰り、「頼む、洗濯してくれ」と母親に言ってお風呂に入るっていう生活を1か月間やっていました。先に水道が復旧し、電気が復旧したのが3月の、10日ぐらいかな？

武田 え、そんなに掛かったんですか。たしか4万戸ぐらい停電したって、台湾に滞在していましたが、ニュースで聞きました。なかなか復旧しない、なんでだろうって。。

田中 そうなんです。で3月8日まで避難所にて、3月10日に自宅に戻りました。

武田 自宅って穴水ですか。

田中 はい。穴水の自宅に。そのぐらいの時期に電気も水道も復旧しました。で、僕の多分住んでた穴水町のその地区が、1番最後に電気が復旧したところで、先ほど見せたんですけど、電柱が倒れてたので、電線の張り直しをしなきゃいけないってことで、ちょっと時間がかかったみたいで。町の中なんか、2月中頃、2月の頭ぐらいにはもう多分電気が戻ってたんじゃない。もしかしたらもっと早かったかもしれない。1月とかには戻ってたかもしれないんですけども、僕の地区はとても遅かったですね。

武田 この河原田小学校の教員用の避難所っていうのも、じゃあ、このぐらいには閉鎖される感じですか。

田中 僕が出た後、3月22日ぐらいまではやってましたね。自宅がもう倒壊してしまった先生はずっといましたね。僕は男1人だけだったんで、1人部屋だったんですよ。でも、女性は図書室で5人ぐらいで一緒に。テントが1棟、1人1つありますけどもね。ただ、その3月の22日頃に、出てってくれてというような感じで教育委員会から言われてしまったらしくて、ちょっとカチンと来てた先生もいたんですけども、車中泊をしてたみたいですね。

武田 いや大変だ。それで教師やるなんて、僕だったらちょっと考えられないですよ。どんな生活だったんですか。

田中 いいところもあったんですよ。河原田町ってところが幸いにも裏が山なんで、山水が出て、僕、毎日シャワー浴びれたんですよ。水さえ来れば、灯油でお湯を沸かす車が来ていて、それで10リッターのポリタンクにお湯をずっと入れ続けて、ぼしゅぼしゅってやって、こう、シャワールームでこうやって浴びるっていうのやったり。 なんとかウォーターっていうのもあって、河原田小学校の校長先生がその避難所所長みたいな感じで、ちょっと仲良くなって、一緒にこのウォーターをうまく運用する方法を研究したりとか。面白いものであれ、水を出しっぱなしじゃないと吸ってくれないんですよ。要は出す力と吸う力を並行で行わなければいけないんですけど、ボディタオルで泡を立てるとあの泡立った泡が吸ってくれないんですよ。本当にね、これ、文句言い出したらきりないんですけど、こうなんだろうな、この吸うところが、このぐらいの小さな黒い丸みたいな、なんかアダプターみたいなものがあるんですけど、そこの上にプールにあるようなプラスチックのスノコが引いてあって、その上でシャワー浴びるんですけど、本来であれば、吸うんだったらもう少し段差をつけないと吸ってくれない。同じようなところにあるから全然吸ってくれなくて、「お願いします、吸ってください」って言いながら笑。でも本当に大変でしたね。あれで、大人1人浴びる水が50人分再生できるというんですけどもね。大体100リッター大人一人シャワー浴びるのに使うらしいんですよ。それが、100リッターの水が、50回再利用できる。除菌をしてお湯沸いてるか、そんな感じで、便利は便利なんです。

武田 シャワー浴びれると違うよね。

田中 ええ、山水で頭洗ってた野球部の子とかがいたっていいですよ。でもあったかいお湯で、15分って時間限られてますけど、それで浴びれる。うん、それはやっぱりこの災害の多い日本ならではの発明品ですよ。あとは、何度かその、自衛隊のお風呂に行ったりとかしたんですけど、すごいあったかいんですよ。

シャンプーもあるし、なんかドンキホーテでこう売ってるような、挟んでこうやって動かす鏡とかがここについてたりして、こうやって洗えたりとか、大体8畳ぐらいのお湯溜めみたいなのがあって、結構深い。このぐらいの深さで、（背の高い）僕が座っても肩まで疲れる。で、すごいずっとあったかくしてくれてて、脱衣所にも石油のあったかいストーブが置いてあって、もう出てもあったかい、入っててもあったかいってような感じで、なかなかあったかい。1度体験してみると、色々ニュースで流れましたけど、世界の实力組織の中で湯に入れるのは自衛隊だけだと。これは本当にね、日本人はやっぱり湯船に入らないと落ち着かないんですよ。だから被災地で湯船に入るとやっぱり嬉しかったですね。自衛隊風呂ってやっぱり人気で、平気で3時間とか待ったりとか、する人がやはりいました。

武田 食事はどうですか。

田中 食事はですね、私が能登に行くときは、土日に母が作り置きしてくれたものをクーラーボックスに入れて持って、河原田小ってところが、家庭室の冷蔵庫を教員用に開放してくれていたんで、そこに入れて詰めて、5日間に分けて食べてって。であとはその勤務先の大屋小学校が避難所になっていたんで、救援物資がたくさん来ていて、パンとかおにぎりとか、そういうのは避難所の方とも知り合いだったんで、ちょっと頂戴って言ったりくれたりしたので、ちょっともらったりとか、あるいは、吉野家の牛丼カー、とかが来て、お昼はそれを、牛丼を避難所の方に配ってくれたりしたのが余ってたりしたんですよ。それを夜用にちょっといただいたりとか、あるいは、全国各地からボランティアの方、ラーメン屋さんの方のボランティアとかがお昼に来て、お昼はラーメン食ったりステーキを振る舞ってくれるお店の人が来て、ステーキを食べたりとかって感じで、結構普段食べられないようなものが、実は避難中に食べられたっていう方もいて。子供なんかでも、やっぱり避難してる間ってね、カンパンだけとかっていう生活をイメージしがちなんですけども、最初のうちはやっぱりそうなんですけども、時間が経ってくるにつれて、その美味しいものが食べられたり、あったかいうどんが食べられたりとかして、やっぱりちょっと嬉しい気分もあったみたいなんですけど、その反面、やっぱり人間というのは欲のある生き物なので、おじいちゃんとかが、僕が1回見たのは牛丼とかを配ってくれたりとか、あるいは夕飯とかは、その、避難所の方が調理室を使ってご飯作ってたりしたんですよ。うん、牛丼とかスープとか、そういうの作ってたりしたんですけども、その、たまたま牛丼が出た日に、生卵はないのかとか聞いたり、ちょっと物足りてくると、もうちょっとっていう、その欲が出たりするのが人間なのかな。そういうのがちょっと見えたりとか、そういうこともちらっとありましたね。

でも、基本的には炭水化物ばかりで、野菜はない。仕方ないですよね、それは。で、皆さん、野菜ジュースがカゴメさんから野菜ジュースが救援物資で来てるのでそれを飲んだり、あるいはビタミンCのなんかサプリメントみたいなのが来てたり、時々なんかセブン・イレブンがサラダの差し入れしてくれたりしたんで、それを食べてたりとか。それで思い出したのは、前に陸上自衛隊に視察に行った時に、東日本大震災でビタミンC不足でチョコラBBがどうのこうのっていうの聞いててビタミン不足ってすごい怖いなっていうのがあったりしましたね。

被災後半年の変化

武田 保護者の様子はいかがでしたか。

田中 保護者の様子はまちまちでした。思い出すのは、学校の建物との関係なんですけど、大屋小学校ってところは先ほどいったように無事だったんですね。4月からその輪島高校は普通の高校に戻るってことで、輪島中学校っていうところに小学校は全員行ったんですよ。僕はもうその時にはもう勤務していなかったんですが輪島中学校って新設中学校なんですけども、元々想定として小中一貫校を想定して作っていたと。近いうちに、能登地区、奥地区、輪島市っていうのは子供が少なくなる、そうなった時に、各小学校を統合し、統廃合して、輪島中学校に みんなで行くっていう想定していたので、時計の軸がぐわっと早くなった。もっと何年か、10年とか先の統廃合が数ヶ月でそうなる。この4月からのことなんですけども。

武田 なんででしょうか。

田中 これも僕はちょっとわかんないんですけど、僕がいた時からもうその話は出てたので。

武田 生徒は戻ってきてますか。

田中 子供たちは240人とか250人ぐらいしかいなかったのが、大体もう元ぐらいの500人ぐらいには戻っているっていう情報を聞いております。県外に避難していた子とかが、学校がもう正式に再開するってきいて、4月からまたスタートしようってことで戻ってきたみたいですね。でも、もう完全に引っ越してしまったっていう家庭も、やっぱり1つの学校にやっぱり1世帯か2世帯ぐらいはあります。大体、2パーセントか3パーセントぐらいは避難してしまう。もう完全にもう転居、輪島からもう出てしまうっていう方も実際にやっぱりいます。

武田 ニュースなんか見ると、震度5、6強ぐらいから上のところだと人口が4000人ぐらい減ってるっていいますが、でも、あれなんですね、子供はやっぱり学校に通っていて、しかも戻ってきてはいると。それはなんか気持ちとしてよくわかりますね。

田中 そうですね。保護者の方も輪島出身で、子供たちも輪島で大人になってほしいって思ってる方がやはり多かったみたいですね。やっぱり転居っていうか、お引越された方も、市街出身の保護者の方、要は、元々加賀地区とかで生活されてた方、あるいは、おじいちゃん、おばあちゃんが加賀地区にいて、生活の拠点がある方、あるいは、あまり縁がないけれども、結婚も、子育てもこっちでして、なんとなくこっちにいるけども、仕事が向こうで見つかったからもう出ちゃおうかねっていう方も、やっぱり転居が多いですよ。で、もう先祖代々輪島に住んでますって人は、避難もほとんどしてないですし、そのままずっと残ってますっていう感じで、やっぱり出ていった、出ていったって言い方あれですけども、避難っていうか転居された方っていうのは、やっぱり生活の拠点とかが 加賀地区にある方がやっぱり多いんじゃないですかね。

あと、保護者の様子だけお伝えしますと、保護者の方は、学校が再開することってやっぱり喜ばれてましたね。それは、子供がいると倒壊してしまったところを片付けに帰れなかったり、あるいは、やはり子供たちとずっと一緒にいると、やっぱりちょっと大変になる。パートとかバイトとかにも行けない、仕事にも行けないっていう感じになっちゃって。学校が再開するってなると、子供たちが手を離れてパートなり仕事なりに行けるってことなので、やっぱりそれは再開してくれるのは嬉しい。あと、学校で途中から給食が始まったんですよ。2月20日ぐらいですかね、お弁当なんですけど。七尾市がそのぐらいの時期にもうほとんど復旧をし、電気と水道が復旧したので、そこでお弁当を作ってもらって、輪島前まで届けてもらって、小中高と配布が始まりました。汁物、お味噌汁とか、そういうのを 作っ

てくれるボランティアの人が来てくださって、豚汁とか、スープとか作ってくださったり、寒い時でしたから本当に、ありがたかったです。あとは、金曜日は、カレーっていう感じで、お弁当なしで、ご飯を受け取って、カレーだけ作る。水さえ、水と具材さえあれば作れるんで。あれは高校の下で作ってました。そんな時は高校がすごくいい匂いで笑。やっぱりカレーの匂いがして、やっぱ、子供たち、カレーが、嫌いな子はやっぱ少ないですから。

「カレーだ、カレーだ」って言って、やっぱカレーの時はすごくいい笑顔してっていう感じで、少しずつ本当に小さなことから日常に近づいていったっていうのが、学校とかの様子ですね。保護者の方も、お弁当が出る前までは午前中で返していたんですよ。となると、やっぱり午前中で仕事が切り上げなきゃいけないってことになってたのが、お弁当をもらって3時まで学校で預かってくれるとなると、だいぶ違う。パートでもそれだけ働けますし。また自分の一人の時間もないと避難所にも大変だし、自宅にいてもちょっと落ち着かないしってことになっちゃって、やっぱり学校が再開することでよかったなっていうことはありますね。

目で見た復興の様子

武田 滞在中に体験された復旧復興の様子で何かおはなしできることはありませんか。

田中 まず僕自身は、自宅前の土砂崩れがなくなったっていうのが、やはり大きなことでした。2月の18日かな、そのぐらいにはもう綺麗に、とりあえず土砂だけどけてってくれたので、ここが通れるようになったんです。やっぱり ちょっとずつだけれども復旧しているのかなと。

武田 これは、誰がやったんですか。

田中 多分、陸上自衛隊の方とか、あるいは金沢の土建会社の方とかも来ていて、ボランティアで、手伝ってたっていうのは聞きました。

あとは、小さなことかもしれないんですけども、毎日その大屋小学校から輪島高校までの道が、大体 片道1キロから1.2キロぐらいなんですけど、それがやっぱりこう隆起してしまうところとかが、どうしてもたくさんあったんですよ。最初は土嚢が積んであったところが、がっこんって、乗り合わせの車で通ってたのが、それが砂利がひかれるようになり、3月の中頃にはアスファルトが引かれるようになりっていうような感じで、本当に微々たることなのかもわからないんですけども、それが、道のその状態が良くなっていくっていうのは、やっぱり運転してて、運転しやすかったんで、小さな、本当に小さなことなんですけども、復旧復興に近づいてるのかなっていうのは感じました。

あとは、倒壊して道路に出てた家とかがちょっとずつ片付けられて、元の片側1車線の道路が戻ったりとか。あとは、先ほど言ったのと里山街道っていうのが、僕が滞在していた時に、金沢から輪島間の要は片側だけでも復旧したんですよ。

やっぱり目に見える復旧復興ってのは、インフラですね。水もそうで、蛇口をひねって水が出た時はやっぱり良かったっていう気がしました。電気ついた時もそうでした。インフラは、やっぱり目に見える復興かなっていうのはありました。そういう時には、先ほどもお伝えしたんですけど、子供たちが、PTSDだったって子も笑顔を取り戻して笑うようになったんですよ。それはソフトな面での復旧復興だったのかなっておもいますが、ハードとソフトの両面で、復旧復興はちょっとずつ、本当に微々たるものが積み重なっていて、ドカンとは変わらないですけども、ちょっとずつ変わっていったんだろうなっていうのは感じましたね。

芹澤 話戻っちゃうんですけど、学校、輪島高校を間借りしていた時って今までと違った管理の仕方ですね。例えば建物とか教室の管理者は高校ですね。それを実際に6つの小学校なり中学校で分けて使うってなると、外身と中身がバラバラになってると。そういう時って、例えば給食の時に何かするだけでもちょっと勝手が違うと思うんですが、そういうところで、なにか困ったところがありますか。

田中 高校で間借りするってことになったので、子供、小学生の児童たちのサイズとやっぱサイズが合わないんですよ。例えば、バスケットコートがちょっと高いんで、使えない。で、なんか多目的ルームみたいなところで体育をやる。でも、大きさは知れているんで、もう全然動けてなかった。子供たちはもうそこで大はしゃぎはしますけど、やっぱ狭いんですよ。

あと、運用面で言うと、その6校の小学校の先生で授業のことで大変だったっていうのが1つあって、2学期の終わりの進度が全くバラバラだったんですよ。また、買ったドリルも違う。教科書は一緒ですけどドリルが違うんですよ。だから、漢字ドリルの進度を合わせるために、オンラインの授業中にここまで終わらせる。で、2月6日のスタートにはここでみんな一緒にスタートさせるとかしないと。でも、ドリルが違うときは、担当する先生が自分の持ってるドリルをプリントして、それで練習するって感じだったんです。でも、2学期ちゃんとやってた学校は、オンライン期間中にやることは少なくて、終わらなかった学校はオンライン期間中にたくさん漢字やらなきゃいけなかったり。そうした授業のすり合わせっていうのが大変だったっていうのがあったですね。

もうひとつは、毎日10時、朝の午前10時から各学年の担当の先生が1名、仮校長室に行って、教育委員会から伝えられた情報を校長先生たちとすり合わせる時間があったんですよ。魔の会議って我々平の教員は言ってたんですけど（笑）、恐ろしい会議があって、1つの部屋に6校の校長先生がこういて、そこに入って行って、その情報伝達をするんです（笑）。けど、各学年ごとに、なんでもメモをする先生と要点しかメモをしない先生がいて、なんでもメモをする先生の学年はいろんな情報が入ってくるんです。こんなこと言ってたから明日こうですよ、そんなのがありますよとか。でも、要点しか言わない学年の先生はポンポンポンって言って、それでおしまい。となると、この自分たちの勤務に帰った後に、俺その話知らないけど、そんな話うちの先生してくれたよみたいな。で、結局自分たちの所属の校長に確認をする。先生、「こんな話出てるんですけど本当ですか」みたいな。その情報のすり合わせと伝達がうまくいなくて、なんかこう、情報が錯綜しちゃって。多分軍隊だったら即死ですよ、みんなして。本当に（笑）。

芹澤 学校ごとに縦割りで情報統制じゃなくて、横割りで学年ごとにやってたんですね？

田中 そう学年ごとに。でも、その情報も流れてくるのもあり、こないのもあって。また先生の主観が入ってちょっとガセネタっぽいもののがあったりして。こんなこと言ってましたみたいな。僕はこう受け取りましたみたいな。警察とかだったら大問題でしょ、みたいな（笑）。その伝達ミスによる情報のすれ違いっていうのがあって。例をあげましょうか。小学校の1棟って手洗い場が1個しかないんですよ。で、いつも1年生が最初で6年生が最後。なんですけど金曜日だけは6年生が最初ってことが、再開して次の週ぐらいかな、給食が始まった週ぐらいに言われたんですけど、それがうまく伝わってなくて、6年生と1年生が手洗い場で鉢合わせるみたいな事が発生した。1年生が先に行っちゃったと。6年生もちょっと来るのが遅かったと。ごつつんこじゃないですけど、こう、なんか芋洗いみたいな感じになっ

て、すごく混んじやったとか。高校で間借りしてたちちょっと特殊な環境だったために、そういうことがあったですね。

武田 建物自体は問題なかったですか？

田中 1回あったのが、高校の校舎がちょっと崩れちゃったんですよ、地震の影響で。

非常時における心がけ

武田 非常時って感覚はずっとありましたか。

田中 もう常にありましたよ。ありえないことですよね。小学校が6校集まってるってこともそうですよ。例えば輪島小学校っていうネームにはならず、それぞれの勤務校、大屋小学校であれば大屋小学校、河原田小学校であれば河原田小学校の先生っていう感じでしたから、みんなで集まってとりあえず子供たちのために何かしようみたいな感じで。当然、気持ちは、こうイライラじゃないですけど、高ぶっていましたよね。地震が来たらどうしよう

と。

武田 震度5クラス、結構ありましたもんね。

田中 そうですね、震度5は、2月とか少なくなっていましたけど、震度4とか平気でありましたからね。もう、でも子供たちすごいもんでね、ガタって言った瞬間にワッって机の中に「隠れる」。もうね、あれは 震度7を経験してないとやっぱできない動きでした。地震だと思う前に揺れたらもう入るんで。あれは本当にすごい。

武田 変な言い方ですが、それに慣れちゃうような感じもありましたか。2、3ヶ月って結構長いじゃないですか。

田中 地震に慣れてしまうっていうのも、なんかしらあったとは思いますがね。震度一、二ぐらいじゃ全然驚かないですからね、子供たちは。もう震度7を体験しちゃうと、震度3とか4になってもね。でも大人がやっぱりあれを経験してたりすると怖くなってきたりする。でも、子供たちは大丈夫だよって言っちゃったりね。震度3とか4でもやっぱり死人は出る可能性もあるので、大丈夫だよ、こんなに揺れ、1回来てるから揺れないよみたいなこと言ってる子もちらっと見かけたりはしたので、少しやっぱり慣れってのはありますね。

武田 東北の子供たちもみんなそうでしたから。でも、1番怖いのは、揺れてるので、震度4とか5で天井が落盤したりってことがあるわけです。それが1番怖いですよ。

田中 震度7クラスで緩んで崩れなかったものが、震度5でずがんと、こう来たりなんですよ。途中で、支援物資で、子供たち1人1人に 折りたたみ式のヘルメットが配られて、子供たち、結構、ランドセルの中に、バッグの中に入れてる子とかいました。

芹澤 てことは、折りたたみ式ヘルメットを配らない状態で再開してたのでしょうか。

田中 いや、学校ごとによって、バラバラでしたよ。うちの小学校なんかは、救援物資が来るのが早くて、ボランティアが配ってたりするんで、ここの小学校には人数分配れたけれども、こっちの小学校もらってないとかってのはやっぱりあったんですよ。ヘルメットが届いた、要は全員分に行き渡ったのが多分2月の終わりぐらいって感じでした。大人の分ないって言われたんですけど、自分たちの身を自分で守ってくれって言われました。

武田 その緊張感っていうことなんですけれど、今言われているのは、能登半島はそれまでに震度6が3回ぐらい来てましたよね。それで突然こんな大きなのが来たっていう、ある種の気の緩みがあったんだと。逆に今度はね、1回でっかいのが来たらもう来ないっていう感覚あるかな、と。それも怖いですよ。僕も東北の時のことよく覚えてますもん。いや、もう、もう来ないよって。だから震度4とか5でもね、うん、この程度であればもう楽ちんと。しか

し、それがやっぱり危ないですよ。今この瞬間もね、危ないですよ。それはどうしたらよいと思いますか。

田中 実際に僕が小松に帰ってきた後の5月かな、震度5か6、ありましたよね。結構小松でも揺れて、おっと思って。でも輪島もそこまで奥能登も被害はなかったんですけども、この間新聞にも出てましたけど、マグニチュード8クラスの地震が起こるかもしれない断層が、佐渡から能登にかけて25か所でしたっけ、そこが見つかったと。それが見つかるってなると、やっぱり油断はもうできないっていうことになってしまって、じゃあどうしたらいいの、能登に住んでいいのこれはっていう感じには、やっぱりなってしまいますよね。

武田 倒壊しなかった建物を利用して授業とかやるのってそれしかないんですけど、本当に大丈夫なのっていう問題は、常にあるんですよ。

田中 もう、それはもう常にありますよね。僕も先ほど言った小学校のグラウンドに建てて1番被害がひどかったのに、大丈夫これ2度目が来た時はプレハブですし、守りきれの、子供たちを守り切れるのっていうのはやっぱりありますよね。

芹澤 割と山がちの地形だと、その後、直後とかに大雨降ったじゃないですか。そういうところもあるので、大雨が全く降らない場所ではない、地震と大雨、どっちで崩れるか、全くそうじゃない時にも崩れるかもしれないっていうのもあると。

田中 実はこの地震が起きる大体1週間前、クリスマスの前日、23日ぐらいに能登でとんでもない雪が降ったんですよ。僕は軽自動車ですけど、軽のバンパーが埋まるぐらい、積まりました。そういう、水がたくさん含んだことで、地盤がずれやすくなってたんじゃないかっていう。だから、面積に占める割合で土砂での被害ってかなり今回多いんですよ。だって、このたった250メートルで16人亡くなっている。

輪島でも、山間、山の地区あたりで、山肌全部が崩れて、土砂崩れで亡くなっている。これは雨、やっぱり北陸特有ですけど、冬でも夜でも冬でも夏でも雨が降る、雪も降る、うっていう、特に能登はせり出してるんで、雲がやっぱり当たりやすいつて言ったらあれですけど、オホーツクの方から来た気団で、雪はたくさん降るっていうのはやっぱりあると思いますね。水をたくさん含んでしまっていた。で、その後、本当に1月5日頃からまた雪が降ったんですよ。そうでした、そうですそう、それで、避難の避難先も、電気が来てなければ、外でドラム缶で薪を炊いてあったまる、そんなのが唯一の暖房器具っていうところもあったので、ちょっと怖いんですよ。もう1回来た時、本当に

武田 そういう、危機感っていうか、そういう感覚もあったわけですよ。

田中 常にやっぱりありました。学校側としてもね、じゃなかったらね、やっぱり子供たち、守れない。危機感っていうのは、やっぱりありましたね。で、細心の注意は常に払って、怪我ないように、命を最優先っていうのが、学校側の意見でしたね。

地震からの教訓

武田 地震から思うこと、教訓とかありますか。

田中 教訓は 本当に普段の何気ない会話が、有事に役立つ時があるんですよ。

僕のテトルを使うというその発想も、教頭先生と普段からなんとなく席も近くて、コミュニケーションを取っていたから、それを思い出したんで。狭い学校、小さな学校で、先生たちの子も全員知ってた。生徒の児童の顔も全員わかっていたってこともあって、意外とスムーズに対応もできました。だから、本当に何気ない会話が、有事の時に役立つんじゃないかな。それは自宅にいた時も一緒に、隣のご自宅の人が例えばおじいちゃんおばあちゃんだ

ったら、そういえばこの間怪我の話してたなと。大丈夫かなって地震があった時とか、大雨の時とかに気かけられることに繋がるので、まずはもちろん自分の命を守ることが大切なんですけど、その後に周りの人を助けて、半分でも助けて気にかけてあげられる、その気持ちを持てればいいのかなってというのは感じました。

そのほか、あの地震から能登半島地震の教訓って何かなと思った時に たくさんあって、ちょっとなんか絞りきれないなってというのが本心と言えば本心なんですけども。

まず、復興っていうのは、元のようにやっぱり能登はこのままだと難しいんじゃないかなってというのは、一県民としての意見としてあって。もちろん 輪島の朝市も復活してほしいですし、輪島の町も、能登の奥能登地域の町も戻ってほしいんですけど、なかなか高齢化が進んでる地域だけあって、おばあちゃんたちが、昔のように朝市に出てき、海産物を売るっていう光景はちょっと復活しづらいんじゃないかと思います。教育現場を見ても今の日本問題の縮図みたいで、問題が詰まってしまってる。少子高齢化が起きて学校の統廃合が進む。学校の統廃合が進んで行くと、子供たちの選択肢がやっぱり狭まってきて、また人が来なくなる。どんどん、どんどんその負のスパイラルが進んできちゃうっていう。東日本大震災とは異なったケースなのかなっていう感じはしますよね。宮城なんかの場合だと、仙台なんかもものすごい被害、被害が出たりして、仙台の復興をしようっていう感じがあったんですけど、石川県金沢市ってほとんど被害はないです。昔、加賀国と能登国って別の国だったので、小松市民とか金沢市民ってやっぱり違う意識があるんですよね。能登っていうのは金沢から見たらもう異世界なんです。異世界だったんです、ずっと。行ったこともないっていう人多いですし。県民でも行ったことないようなところを皆で復興していくっていうのは、やっぱり難しいんだろうなって。こういうところの復興の難しさっていうのはものすごく感じますね、僕としては。

あとと思うこととしては、同じような被害の地震が来ても、被害が少なくなるような体制作りをしなければいけないんだろうなってことです。要は復旧ではなくて復興、新しく何かしなければいけないんだろうなっていうのは強く思います。元のさやに戻りました、でもまた同じことを、マグニチュード8ぐらいの地震で繰り返しましたって、何も学んでないじゃないのってことになっちゃう。新しい町づくりを検討しなければいけないんじゃないかな。

武田 それは能登だけの問題でもないですよ。

田中 輪島だけでなく、その奥能登地域全体で、いやそれは日本全体でなんですかね。日本全体でこんな過疎の進んだ半島ってやっぱり多いですから、新しい町づくりに取り組んでいかなくはならない。そういうのは教訓じゃないかなと思いますね。

武田 さっき東日本大震災と比較されましたけど、いや似てるところありますよ。少子高齢化って、東北だってあるし。三陸なんてのはその典型中の典型だったわけだから。でも、今のところ、その比較で言うと、やっぱり向こうは、東北の方はずっともないお金つぎ込んで復旧したんですよ、スーパー堤防まで作っていく。やったんですよ。でも能登は、まだ、少なくとも今まではやってないですね。しかし、これからやるのかなっていうのは、かなり期待薄という違いですよ。

さっき、元に戻るのかなっていう発言があったんだと思うんですけど、僕の今の感じで言ったら、多分やらないだろうなと。今回の震災は、それをどういう風に考えるかっていう問題を突き付けているんだと思うんです。能登人には大変辛い言い方になる。

田中 もうまさにその通りです。

武田 東北はああいう風にしたいけど、あれでよかったのと。実は地元の人たちで思っている人もいる。これ昔の景色じゃないよね、昔の海の風景じゃないよね、こうしてよかったのかな、これが復旧とか復興っていうんだったら、しない方がよかったねって意見も正直ある。今回の能登半島地震ってこれを日本人に突き付けたんですよ。考えなくちゃいけない。本当に。

田中 そうですよ。

武田 田中さんに答えがあるわけじゃないのはよくわかってんですけど。

田中 いえいえ、でもなんだろうな。阪神淡路大震災っていうのは、火災がどうしても大きく報道されてしまった地震ですよ。じゃあ、東日本大震災って何かって言えば、津波と原発事故ですよ。津波というのは、小学生だったけどものすごくよく覚えてます。津波って本当に全てを巻き込んで、何万人も死者を出してしまったものですよ。じゃあ能登半島地震っていうのは何か。それぞれが、なんか小さなものが群発して、輪島では燃えた町、珠洲市と能登町では巻き込んでくる津波、津波によって流された人ってほとんど出てないけど、あと穴水町は土砂災害。言い方なんか正しくないのかもしれませんが、中途半端な起き方でいろんな災害がおきてしてしまったせいで、なんかすごく復旧が難しくなっているのかなっていうのはあるんじゃないかな。そんな感じはします。

武田 これから日本の各地方で災害が起きた時に、実はこのパターンも考えておかないといけないっていう教訓もありますね。こういうパターンが普通になったりするかもですよ。とんでもなく大きいのは——南海トラフばかり取り上げられていますが、それ来ればね、違いますけど——、それよりも各地で小さめのがボンって起きた時の備えも必要ですよ、これからは。1万人死ぬって巨大地震だけじゃなくてね。

あとはね、地震起きた後にその地域に生業（なりわい）が残らなければ絶対に「復興」（新しい誕生）はないですよ。だから、やっぱりね、輪島の朝市がどうなるかっていうのは、やっぱり1つのシンボルとしての意味があるんじゃないかと思います。あそこをこれからどうするか。で、これもしやな言い方になるけれども、やっぱり輪島市の人たちの問題。その人が、じゃあここでもう1回自分たちは復活すんだって言って、彼らが復活した時に、復興の灯っていうかね、それがともって、ちょっと変わってくるのかなと。そこに支援するのは私は希望が持てると思うんです。しかし、じゃあ、そこで火を使わないオール電化の朝市を作りますとか、なんか違うような気がするよね。本当に、輪島は試金石ですよ。これからどうなるのかなっていうね。

田中 今、輪島市の小さなショッピングモールで輪島の朝市が再開したんですよ。生物はちょっと売れないんで、乾物メインで売ってるんですけど、町の人がやっぱり買いに来るんです。こんな感じで「出張朝市」って言ってやってるんですけど、神戸に行ったりとかもしてます。

あとは、どうしても、燃えてしまったという印象が強くて、昨日もちらっと県内のニュースでもやりましたが、その燃えてしまった街って、本当に、先生も言ってたけれども、ウクライナじゃないですけど、本当に戦争で燃えてしまった街と同じ感じですよ。燃え方も、車がバーストしたみたいに燃えてしまっ、未だに手をつけられないでっていう感じなので。どうするのかなあ。元あった、朝市ってのは戻しづらいですよ、やっぱり。高齢化問題があったりするしね。

あと、ニュースでも言ってますが輪島の漁港が4メートル隆起したんですよ。だから船がつけられない。輪島の漁師たちってどこ行ってんのっていったら、金沢の工事現場でバイト

してる。金沢の漁業組合で働いてるとかも聞きます。魚を捕ってくるところも変わっていてダメだし、売るところもうまくいかない。なかなかね、ちょっと進みづらいですよ。復興は本当に大事だけれども、課題が大きい。

武田 あと、災害はこれからも次々発生するけど、それって上書き、上書きされてくんですよ。悲しいかな、人間の記憶ってそんなもんです。しかも上書きで保存してくれればいいっていう。

田中 そう、それで、どんどん、どんどん忘れ去られていく。東日本大震災は、ものすごい被害が出ましたよね。結構みんなが忘れないでいるのかっていうと、東京も停電が起き、計画停電をやったり、電車で帰れなくなったっていうことが、東京都民、関東の周辺の人がおぼえてんだよね。そうすると、やっぱりメディアもあんな経験あったよねとこう取り上げてなくならない。しかし、やっぱり地方になるとね。僕、石川に今住んでますけど、じゃあ熊本の地震のことって今メディアが取り上げてますかって言ったら、あんまり取り上げてないんです。復興してるかどうか僕も全然わからないですよ。どうなんだろうなっていうのはわかんなくなっちゃうって感じですよ。

武田 東京の人間が、なぜ熊本のことに関心持つのか、なぜ能登に関心持つのか、これ難しいよね。持ちなさいよっていうのは言えるけれどもなんでっていうとすごく難しくなっちゃう。これだけ災害大国になって、そこに住む人たちには本当に大事、しかし、今、この瞬間起きてる台風で大変な岩手とか、私たちはなぜ心配しないといけないのかって考えるとね。

田中 それと、多分震度6強の地震とかが群発すると、能登のような被害が各地で起きる。例えば、金沢市とかで起これば結構いろんなところからこう支援が入れるんですけど、能登半島のような特殊な地形で起きちゃうと、どうやって支援したらいいのって、そんなところって、結構、日本って多いですよ。

武田 そうね、これも教訓の一つですよ。

芹澤 地震と土砂災害でも、なんか来たら、もう助けられないのが確実な場所にあって。

武田 こんなにアクセスっていう問題がね、クローズアップされたのも珍しいですね。

田中 だから、東日本大震災なんかの場合だと、岩手に宮城、福島ってあっても、日本海側の東北圏から入れたり、あるいは関東常磐道で登っていけたりしたんですけど、能登は1本しかない大動脈が崩落してしまったんですね。その昔使っていた道路も緊急車両で使われてしまう。コンクリートから人への投資とかって、こう言うけれども、地方にしてみたらやっぱり道路がないと生活ができない。やっぱこれは バランスじゃない考え物ですよ。その道路行政の大切さ。本当に。

北陸という共同意識

武田 もう1つ思ったのは、東日本大震災の時に、芸人のサンドイッチマンっていうのがいて、彼らの功績ですごく大事だと思うのは、彼らは「東北」って言ったんですよ。福島魂とか宮城魂とかじゃなくて、東北魂って言ったんですよ。福島の中だって、本当は県民だって同じようには災害を考えてない。でも、東北は一体なんだっていう雰囲気を作った。今、東北の人たちはそういう気持ちでいると思うよ。だから、北陸の人もね、実は新潟だって富山だって被害受けてんだから、加賀国と能登国で違うっていうのもよくわかってますけど、やっぱりそうではなくてね、もう地域がやっぱりこう連合、連携してく、共同意識持つ、そういうきっかけが出てくれればね。だからこれは北陸の人たちの問題なんです。皆さんがそう思わないと、そうはならない。こちらの人間はそこには介入できない。富山の知り合いがい

るけど大変だって言ってた。ついでに言えば、新潟っていうのがすごいやっぱりキーとなる県だっていうかね。細長いっていうか、広いっていうかね。一部がダメでも、どこかは大丈夫っていうね。

田中 そう、関東にもアクセスしやすいですし、東北にも行けるし、北陸にも行けるって本当ですね。

武田 だからね、こういうのとやっぱうまく連携取るっていうのもね、大切ですね。安全保障と災害の時の危機管理って一緒なんだなって思うね。

田中 そうですね。うん。

一同 どうもありがとうございました。

武田 じゃあ、ちょっとこれ、まず文字を起こさせていただいて。ちょっと1回ぐらい見てください。

田中 わかりました。はい、ありがとうございました。

編集後記：2024年1月1日に起きた能登半島地震にたまたま居合わせた本学OB・田中氏に、武田とゼミOBの芹澤氏がインタビューし、前田篤利（4年生）、川崎直輝（同上）が文字起こしを担当しました。インタビューからは、現場の苦労と現場での判断の大切さ、また危機の下でも前向きでバイタリティある人間が現場にいることの大切が伝わります。本取材記録が、今後もいつでもどこでも起きる可能性のある災害に対処するヒントになれば幸いです。なお、本文中の記述に関しては災害にあわれた皆様の心境や人権に細心の注意を払い一部加筆修正いたしました。ご質問などございましたら、ご一報くださいますようお願い申し上げます。

連絡先：武田知己（大東文化大学法学部教授）

ttakeda★ic.daito.ac.jp ★を@に変換願います。

copyright	: 田中柊麻、武田知己、芹澤優仁
編集担当	: 前田篤利（大東文化大学法学部法律学科4年）、川崎直輝（同政治学科4年）
発行者	: 武田知己ゼミナール
住 所	: 〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿 560 大東文化大学東松山校舎 4-308号室 武田知己研究室
発行日	: 2025年3月24日
